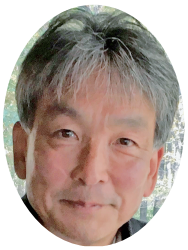
巻頭言

ハウツー



高度情報科学技術研究機構　常務理事
谷 正之

ハウツー本が好きだった。啓蒙書やビジネス書は勧められてもなかなか読む気になれなかったが、釣れない、勝てない、飛ばない、書けないなど、何かうまくいかないと、安直な解決策を求めてハウツー本をすぐ買った。釣り、テニス、ゴルフ、語学、作文、発表など、趣味から仕事がらみまでいろいろ買った。内容が薄くてがっかりすることも多かったが、折に触れ役立ったものもある。

就職して研究所に配属された。大学ではテニスばかりしていて、とても研究に進む感じではなかった。バブル崩壊もまだまだ先でおおらかな時代だった。研究といっても、上司に言われるままにプログラムを作っていただけだった。数年たっても論文も特許も書けず、研究することに自信が持てなかった。研究所では報告書の書き方や発表の仕方については熱心に指導してくれたが、肝心の研究そのもののハウツーについては話題にならなかった。参考になる本や記事はないかと探してはいたが、インターネットもない時代だったのでこれといったものは見つからなかった。

何年も鳴かず飛ばずのままであったが、幸運にも１年間米国に滞在する機会に恵まれた。その時、同じように日本から来ていた人が「おもしろいのを見つけた」と言って、“How to do research at the MIT AI Lab”と題した文書のコピーをくれた。MIT AIラボの大学院生らが、いかにめげずに博士論文を書き上げるかについて、経験則をまとめたものであった。

「研究の成功を保証するレシピはない」から始まるこの文書は、実際とてもおもしろかった。論文の書き方、発表の仕方といったよく目にする事柄だけでなく、研究が行き詰った時、自信をなくした時、燃え尽きた時にどうするかについて熱心かつリアルに書かれていた。

当時のMIT AIラボといえばAIに関する世界最先端の研究所の一つだった。その頃は、AIに限らずコンピュータサイエンス分野では研究成果も研究環境も米国が日本より圧倒的に進んでいると感じていた。自分が発表したいと思う国際会議でも米国の著名研究者が毎年何本も論文を通すのに、日本からはほとんど発表がないという状況だった。米国の後追いばかりしているのではという劣等感が常にあった。この文書を読んで、程度の差はあれども、彼らもそうやすやすと研究しているわけではないという心持になり、劣等感が軽減された感じがした。

この文書は30年以上たった今でも読まれているのか、インターネットからダウンロードできる。AIに関する具体的な記述については古くて役に立たないところも多い（深層学習全盛の今とは異なり、当時は人が知識をLISPでプログラミングするというのが主流だった）。驚いたことに、その辺について解説しているYouTubeもある。